

〈論文〉

# 『骨董屋』における ネルの二つの“死の意味”

— “悲劇の死” と “不滅の死” —

松本 淳子

## Abstract

Looking similar to *Oliver Twist*, *Pilgrim's Progress*, and *The Exhibition of Humphry Clinker* in the point of view of the basic structure, *The Old Curiosity Shop* has one significant difference, the death of the virtuous heroine Nell, far from the happy endings of the rest. It must be the most controversial point and the hardest part for us readers to understand. However, closely examining Nell's death, we find it having two aspects and roles. One is “the tragic death” as a pathetic symbol of all children of the lower classes who were the victims of avarice at that time, to show the cruelty and injustice of the Victorian industrial society built on the sacrifice of those poor, and to evoke sympathy in the contemporaries' mind. The other is “non-death” with eternal life as an angel, the eternal good influence of her humanity among people. Love, sympathy and all other goodness Nell embodies can be a solution to the social problem Nell's tragic death points out and can unite all the people to establish a harmonious society based on humanistic ideals. Viewed in this light, the death of Nell takes on a new meaning, the double-layer presentation of both the social problem and its solution.

## I はじめに

『骨董屋』(*The Old Curiosity Shop*, 1840-41) は、チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)の、『ピクウィック・クラブ』(*Pickwick*

*Papers*, 1836-37)、『オリヴァー・トゥイスト』(*Oliver Twist*, 1837-39)、『ニコラス・ニクルビー』(*Nicholas Nickleby*, 1838-39) に続いて発表された長編小説第4作目である。いずれも誠実で正義感の強い主人公が様々な愉快な事件や不運に遭遇しながら、紆余曲折の遍歴を経て幸せになる過程を、機知とユーモア、哀感を交え描いた長編小説である。しかし、『骨董屋』にはそうした明るさはなく、A. W. Ward が “Keynote is that of an idyllic pathos” (42) というように、牧歌的ペイソスが基調をなし、主人公である14歳の少女ネル (Little Nell Trent) が死ぬという点では、そうした前作作品群のハッピーエンドと大きく異なるのである。Peter Washington が『骨董屋』を “tragedy of sorrow” (2) と呼び、『骨董屋』の児童向けに翻訳された題名が『処女ネルの死』であったことや、ネルが弔鐘 “knell” と同じ響きを持つ名であることからわかるように、『骨董屋』は悲劇の少女ネルの物語である。

ディケンズの生前中、『骨董屋』は彼の作品中で最も有名だった作品である。イギリス中の人々がネルの不幸に涙を流し、その運命に一喜一憂した (*Victorian Calendar*)。ネルを心配するあまり、読者からディケンズの許に多くのネルの助命嘆願の手紙が送り付けられるほどであった。熱狂はイギリス国内に留まらず海を渡りアメリカにまで及び、イギリス船がニューヨーク港に入ると、待ち構えていた群衆が “Is Little Nell dead?” と大声でネルの安否を尋ねたというエピソードは有名である (Pope-Hennessy 149)。そしてネルが悲運の死を遂げると、国中でその死を悼み喪に服したのである。Margo Masur は、“Nell’s death at the time it was published in 1841 was met with passionate reactions as it aestheticizes the historical attitudes toward premature death caused by disease and urbanization.” (48) と述べている。哲学者 Thomas Carlyle は、さめざめと泣いたと伝えられているし (“Thomas Carlyle, previously inclined to be a bit patronizing about Dickens, was utterly overcome with grief”) (Johnson 303-04)、

政治家 Daniel O'Connell は泣き出して窓から本を投げ捨てたと言われている (“Daniel O'Connell was so upset by the death scene that he burst into tears and threw the book out the train window.”) (Ford 55)<sup>1</sup>。

しかし、19世紀末になると、ネルの死のペイソスがセンチメンタル過ぎるとして批判されるようになる。Algernon Swinburne は、“Nell was a monster as inhuman as a baby with two heads.” (Gilman, 276) とネルをあざけり、Oscar Wilde は、吹き出しそうだとして “One must have a heart of stone to read the death of Little Nell without laughing.” と述べている (Pearson, 235)。Aldous Huxley は、『文学における卑俗性』 (*Vulgarity in Literature*, 1930) の中で、『骨董屋』をおろかで卑俗的でセンチメンタルだとして、“It is distressing in its ineptitude and vulgar sentimentality.” (57) と酷評している。David Cecil は、ネルの死は安っぽいレトリックや小道具で飾り立てられていると、“... by church bells, falling snow at the window, and every other ready-made device for extracting our tears that a cheap rhetoric can provide” と批判している (30)。Steven Marcus は、『骨董屋』を “Dickens's least successful novel, a work in which he seems to have lost much of his intellectual control, abandoning to all that was weakest and least mature in his character as a writer” (129) と評している。

このように、ネルの死の評価は大きく分かれるところであるが、そもそもネルの死そのものに疑問が生じる。『骨董屋』は、『オリバー・トゥイスト』の完成から1年ほどで執筆されている。両者とも、登場人物たちは正確に善人と悪人に分類され、その善と悪の対比が明確である。そして、悪が減び、善が栄える、いわゆる勸善懲悪が律儀なほどに遂行されているのである。にも関わらず、なぜ『骨董屋』では善の権化ともいべきネルが死ぬのだろうか。また、『骨董屋』の下敷きとなっているであろう他の2つの作品とも、

主人公の死という点で異なっている。1つ目は、Rachel Bennet が指摘するように、John Bunyan (1628-88) の『天路歷程』(*Pilgrim's Progress*, 1678) である(423-34)。永遠の生命を得るために、クリスチャン(Christian)は「滅亡の都」を出発し、「虚栄の市」、「落胆の沼」、「死の陰の谷」など様々な難所を経て、破壊者、偽善者、愛銭者、悪魔アポロンとの死闘など多くの誘惑や困難を乗り越えて「天の都」に辿り着き、救いに至る。福音の教えを説く寓意物語として、大人から子供まで多くの人々に愛され、読み継がれていた。祖父と共に住み慣れた骨董屋を後にしたネルが、逃れ出てきたロンドンを見返りながら「まるであのクリスチャンになって、背負ってきた悩みも苦労もみんな草の上に捨ててきたような気がする」(ch.15)と語り、「2人の巡礼者」として旅に出ている。当時の読者であれば、その一言で Bunyan の物語を連想し、彼女らの旅が一種の巡礼ともいうべき性質を帯びたものになるであろうことを察知したに違いない。実際、貧困と貪欲がはびこる大都会ロンドンを逃れ出た2人は、流浪の旅芸人の世界や、汚染と疫病が蔓延する工業地帯、失業した労働者の群れの恐怖や破壊行動など、19世紀イギリス社会の暗部を目撃することになる。様々な人々や出来事と遭遇しながら2人は旅を続け、ついに自由と自然の美しさに満ちた田園へと至る。その旅の軌跡は、確かに『天路歷程』のそれをなぞらえているように見受けられるが、魂の遍歴の行きつく先は、輝きに満ちた生命の世界ではない。美しくも古びた教会での主人公の死である。

さらにもう1つ、ディケンズが愛読していた Tobias Smollett (1721-71) の『ハンフリー・クリンカー』(*The Expedition of Humphry Clinker*, 1771) も下敷きになっているのではないだろうか。主人公マシュー・ブランブル(Matthew Bramble)が持病の痛風の治療のために旅に出、汚染され病んだ都市社会と、のちに癒しを得ることになる田園社会の対比の構図は似ているように思える。しかし、マシューが田園で癒され、みなが幸せになるのとは対照的に、ネルは田園の古い教会で孤獨な死を迎えるのである。

こうした比較の点からもわかるように、ディケンズ小説の中では善き女主人公が死ぬ唯一の小説である。では、なぜネルは死ぬのか。なぜ幸せ探しの旅に出たネルは死ななければならないのか。なぜ作品中の登場人物の中で最も善良なネルが、最も悪の象徴ともいうべきクウィルプと同じ死を与えられなければならないのか。本稿では、ネルの死の意味を、当時の社会と作者ディケンズの生涯とを関連づけながら考察していきたい。そして、ネルの死には二面性があり、悲劇の死という側面には当時の資本主義社会批判という役割があり、不滅の死という側面には死後の永遠の生命、つまり残された人々の中に残るネルの善性の波及によって思いやりと共感に結ばれた社会の実現が可能となるという、その社会問題に対する解決策の提示という役割がそれぞれ与えられていることを見出していきたい。

## II ネルの悲劇の死

『骨董屋』は、ディケンズが新しく創刊した週刊雑誌『ハンフリー親方の時計』(*Master Humphrey's Clock*)に1840年4月から41年2月まで掲載された連載の長編小説である。この雑誌は当初、架空のクラブのメンバーによるエッセイや小話を連載するという設定で始められた。だが、ディケンズの長編小説を期待していた読者が単なる雑話集だとわかると購読をやめ、売り上げが激減してしまう。その対応策として第4号に掲載した「幼子の話」(“a little child story”)を急遽長編小説に切り替えたのである(Preston 6)。そのため、毎週締め切りに追われながら書き継ぐことになった、このにわか長編小説は、即興的で行き当たりばつたりのものとなり、当のディケンズにさえ主人公ネルが死ぬかどうかわかってないのだろうと思われていた。そのためその構成は「最も評価しがたいものの1つ」(A. Wilson 138)と評されている。しかし、ネルの死を予感させるものは早い段階から用意されているのである。ネルが「こんなにおじいちゃんが変わってしまったのに、こちらではわけがわからないでいるなんて、いやよ。さもないと、私、心がくだ

けて死んでしまうわ」(ch.9)と述べるこの言葉は、単に“死”という言葉が初めて登場する場面というだけでなく、後に祖父の豹変ぶりをもたらすネルの死を暗示しているかのようである。また、多くの子供たちの死との遭遇、老婆の死、墓堀男など、死を連想させるものが多用されており、死の序奏として最もよく登場する墓のモチーフは、16章(全73章)からすでに始まっていて、その序奏はネルの死が近づくにつれて次第に頻繁に奏でられているのである。読者に愛されているネルを死なせてしまう迷いやためらいはあっただろうが、こうした早くからの伏線を見ると、明らかにネルの死は当初から予定されていたように思われる。では、なぜ善良で無垢な少女は死ぬことを運命づけられなければならなかったのだろうか。ヴィクトリア時代の利潤優先の資本主義、投機熱の拝金主義、産業社会における労働者や子供たちの悲惨な現実から、ネルの死の意味を読み解いていきたいと思う。

ネルの死は、3つのものの犠牲となった悲劇の死である。1つ目は、ダニエル・クウィルプ(Daniel Quilp)との関係に見られる、利潤優先の資本主義の犠牲者としての死である。明確な善と悪の対比があることは前述したが、善の勢力の代表であるネルと対極にあるのが、悪の勢力の代表であるダニエル・クウィルプである。彼は他者に精神的・肉体的苦痛を与えることを無上の喜びとする、悪意に満ちた怪物で、ずる賢く計算高い欲の塊である。ネルの祖父である老人(the old man)にお金を貸し付け、もはや返済できないと知るや、情け容赦なく、骨董屋も家具もネルの寝室さえもすべて差し押さえ、借金の形にまだ幼いネルを「おれの二号」(ch.6)にしようと執拗に付け狙う冷血な悪魔である。「冷淡な債権」と「金づくの世話人」(ch.11)に囲まれたネルが「非情の人たちからの逃避」(ch.12)を決意したことからもわかるように、明らかにクウィルプは、金銭のためには情け容赦のない債権回収もいとわない冷酷非情な利潤追求の資本主義原理を体現しているのである。グロテスクで残忍無比な悪魔のようなクウィルプと、美しく清純無垢な少女の対比が、いたいけな少女が冷酷な資本主義の犠牲となって死へと追

い込まれていく不条理を際立たせている。

2つ目は、老人との関係に見られる、拝金主義の犠牲死である。「幸福になる方法は札とさいころにあるんだ」(ch.29)という老人の言葉に端的に表されているように、老人は、ヴィクトリア時代の貪欲な拝金主義や投機熱の象徴である。作中にも度々競馬場や賭博小屋が登場することからもわかるように、イギリスでは19世紀初頭から投機が盛んになり、30年代には投機熱が非常に高まっていた。Edgar Johnson も、“Since the close of the Napoleonic Wars the stock-gambling mania had spread in waves of rapacity and ruin.” (326) と述べているように、その当時の株式への投機熱は強欲と破滅の波となって世に蔓延していたのである。お金に貪欲でお金を手に入れるためには見境がなくなる老人は、ディケンズの父ジョン (John Dickens, 1785-1851) をモデルにしている (Spilka 430)。父ジョンの浪費癖のためにディケンズ一家の家計は窮迫していき、ロンドンの貧民街の小さな屋根裏部屋に移り住んだディケンズはひどいショックを受ける (Wilson 4)。借金は更に膨らみ、ディケンズはわずか12歳で家計を助けるために靴墨工場に働きに出されるが、ついに借金が返済できなくなった一家はマーシャルシー負債者監獄 (Marshalsea Debtors' Prison) に収監されてしまう。多感な少年ディケンズにとってそれは生涯忘れ得ぬ屈辱と恥辱となるが、この時の体験こそが、のちの彼のすべての作品に一貫して流れる、貧しい人たちに対する温かなまなざしと、彼らの不幸を生み出す社会体制に対する強い正義感の源となっている。父の浪費癖は生涯続き、そのたびにディケンズは後始末をさせられる。保護者となるべき父親を被保護者であるはずのディケンズが庇護し、子供らしい子供時代を過ごすことなく貧困の犠牲となってきた自身の経験を、幼稚な老人と生活の重荷をすべて背負ったネル (ch.43) の関係に投影させたのである。

幼いネルは賭博狂の老人を“never think of money again” (ch.9 : 81) と流浪の旅に連れ出し必死に愛情を持って導こうとするが、老人はその

思いを度々裏切りネルを絶望と破滅の淵へと追いやるのである。Philip Hobsbaum が、“Nell is not Quilp’s victim but her grandfather’s; Quilp can’t even find out where she is.” (58) と述べ、James R. Kincaid が、“Directly responsible for her death by removing her from every point of safety and kindness, he, it is clear, is much closer even than Quilp to being the chief villain.” (80) と指摘するように、老人こそが本当の意味でネルの居場所を奪い続け死へと追いやった張本人なのである。そもそもネルが路頭に迷う羽目になったのは、老人が孤児である孫ネルの将来を案じ一攫千金を夢みて賭博に手を出し、高利貸シクウィルプから次々とお金を借りて破産したためである。旅先で親切な蠟人形師ジャーリー夫人 (Mrs. Jarley) に拾われ、やっと温かい居場所と働き口を見つけるが、ここでも老人の賭博熱が再燃する (29、30章)。賭博師のアイザック・リスト (Isacc List) とジャウル・ジョエル (Joe Joel) に偶然再会した老人は、ネルの所持金を奪い取ってまで賭けの勝負に出たもののまたすべて失ってしまう。さらに、ネルの大切なわずかな貯金を狙い、夜中に寝室に忍び込み、有り金すべてを盗んでしまう。どんな強欲な賭博師よりも欲得に走る祖父の狂乱ぶりを目の当たりにしたネルは、こんな姿を見るよりは死んだほうがましだと拷問の苦しみを味わう。老人の賭博熱は収まるどころかますます過熱し、ついには、自分たちの面倒を見てくれていた親切な恩人ジャーリー夫人の金にまで手を出そうと策謀する。そんな祖父の狂気に苦悩したネルは、金銭の影から逃れるためやっと見つけた温かい居場所を去り再び旅に出るが、ついに行き倒れてしまう。老人に名前がわざと付されていないのは、老人が拝金主義の価値観に毒された当時の人々の代表だからではないだろうか。2人の幸せ探しの旅に出た健気な少女が、拝金主義に侵された老人の犠牲となり幼い死を遂げる悲劇を、老人とネルの関係において描いているのである。

3つ目は、その当時の産業社会で苛酷な労働を強いられ犠牲となった多くの労働者や子供たちの受難の象徴としての犠牲死である。18世紀中頃から19



世紀初頭にかけてイギリスは産業革命の真っただ中にあり、工業生産の飛躍的な伸びによる経済的成長には目覚ましいものがあった。しかし、その繁栄の裏には労働者階級の悲惨な現実があった。1830年代になると、凶作続きと経済不況にあったイギリスでは、失業者が町に溢れていた。労働者によるチャーターイズム運動が激しい盛り上がりを見せる中、デモやストライキ、暴動が各地で頻発していた。ディケンズは友人の Forster と共に、イングランド中部の工業地帯 (Black Country) を視察旅行し、その時の体験を下敷きにしてこの場面を描いたとされる。後に彼は Forster に手紙を書き送り、“You will recognize a description of the road we travelled between Birmingham and Wolverhampton.” (Foster 131-2) と述べている。『骨董屋』は、まさにそうした弱者にとっての受難の時代に書かれた小説である。

ネルは放浪の旅の途中で、そんな工業都市の惨状の目撃者となる。44章では、都市部の冷たい人々と、貧しい地区の貧困や非人間的労働環境が描かれている。町で通りすぎる人々は取引や陰謀の狡猾な表情を浮かべ、無関心と闘争が支配していた。貧困地区では、真っ赤な炎と煙をあげる悪魔のような溶鉱炉の前で、子供の頃から火だけを友に来る日も来る日も働き続けてきた貧しい工場員と出会う。45章では、さらに悲惨な工業都市の現実を目撃する。煉瓦焼きの溶鉱炉のエンジンは、呼吸も困難になるほどのどんよりとした大気、損ねられた大地、絶望を生み出していた。周囲では、失業者があふれ、ぼろをまとった人々が物乞いをし、疫病と死が蔓延する中、孤児が泣き叫んでいた。ネルがひと口のパンを恵んでもらおうと訪れた家では、恵むパンもなく、生き残った最後の子供が死んだばかりだった。ネルが目にした現実、労働者の非人間的な生活の惨状とその犠牲となった無数の子供たちの姿だった。ネルが「最近歩き回ったあの古い墓地で、子供たちの墓の上で、どれだけ多くの土饅頭が緑におおわれていることだろう」(ch.26) と悲嘆したように、子供の頃から働かされてきた工夫、多くの孤児、貧しい家々の子供の墓、最後の子供まで奪われた失業者の家庭など、多くの子供たちが自然と人間性

を破壊する産業社会の犠牲となっていた。

この工業都市を出る頃から、ネルは「自分の病気はとても重い、もしかすると死ぬかもしれない」(ch.45)、「歩いてゆくにつれて前途の希望の影は薄れていった」(ch.45)と感じ、ついに気を失い倒れてしまう。疲労と悲しみでいっぱいだったネルは、次第にあの世に安らぎを見出していく。社会も肉親さえも拜金主義に侵され、人間の尊厳を踏みにじる無慈悲なこの世にもはや未練はないかのように、次第に墓や死に憩いを求めるようになる。

古い教会でこれからの住まいとして紹介された部屋に入って、「死ぬのを学ぶのにいい場所だわ」(ch.52)と感じ、炉端で自分の過去の運命を振り返りながら「死の厳粛な存在」(ch.52)を感じ、墓で「自分は幸福で安らいでいられる」、「こうしたものにつつまれて眠るのは苦痛ではないだろう」(ch.53)と感じる。墓地を「私の庭」(ch.54)と呼び、そこで長い間憩うようになる。そしてネルは苦しみのないあの世へ本当に旅立ってしまう。死んだネルが発見された場面では、「小さな寝台で彼女はいこいについて」いて、「彼女の以前の心配、苦しみ、疲労の痕跡」はみな消え失せ、「みじめさと苦しみのつきまとう場所を通り抜け」、「静かな美しさと深い安らぎの中に」いたのである。幼くして死んだネルは、まるで「神様の御手から今作り出され、生命の息吹きを待っているかのよう」(ch.71)であった。この言葉は1章でネルが初めて登場した際の言葉「神の御手から離れたばかりの小さい子供たち(“these little people ... who are so fresh from God”）」(ch.1:9)と呼応するものとなっており、その短すぎる一生を強く意識させるものとなっている。そして、このネルの死は、彼女がこれまで旅で出会ってきた他の多くの子供たちの死を私たちに想起させずにはおかない。

ネルは、当時の産業社会の犠牲となった少年労働者や子供たちの受難の象徴として死んだのである。George Gissing は、ネルは、当時工場や鉱山で苦役していた多くの子供たちの受難の象徴だとして、“Heaven forbid that I should attribute to Dickens a deliberate allegory; but, having in

mind those helpless children who were then being tortured in England's mines and factories, I like to see in Little Nell a type of their sufferings; she, the victim of avarice, dragged with bleeding feet along the hard roads, ever pursued by heartless self-interest, and finding her one safe refuge in the grave.” (211) と述べている。E. Johnson もまた、ネルは悲運な子供たちの象徴だとして、“Nell herself is a pathetic symbol of all the forgotten and ignored, left to wander through the difficulties of their existence as best they may.” (319) と評している。ネルは、こうした功利社会の犠牲となった無数の子供たちの象徴であり、彼らの象徴として死ぬことで、人々の共感や憐憫の情を呼び起こす役割を果たしているのではないだろうか。

ディケンズは、まだ年端もいかぬ幼い子供たちが、子供時代を奪われ世の荒波にさらされることに対する憤りを1章において強く訴えている。また12章においても、子供を光と生命、希望、愛情、陽気、幸福にあふれるものとして礼賛している。そんな幼児期も抜けきらぬ子供たちが、世の喜びも知ることなく、苦しみと悲しみだけを味わい死へと追いやられていく不条理を、清純無垢なネルの死は訴えているのである。「彼女の若々しい魂がまだ幼いのに飛んで行ったあの世界（天国）に比べ、この地上がどんなものか考えてごらんさい」、「彼女は死んでいた。かわいらしい、優しい、辛抱強い、気高いネルは死んでいた」(ch.71) というこれらの言葉は、純粋な子供の死に対する憐憫の情を人々の心に呼び起こさずにはおかない。事実、美しく心優しい少女の死は貴賤を問わず万人を涙させた。これこそが、ネルの死の役割なのである。

このように、ネルの死は、利潤追求の資本主義、投機熱などの拝金主義、非情な産業社会の3つのものの犠牲となった悲劇の死であった。そしてその悲劇的な死は、大人の利己心、強欲、貧困が支配する社会の犠牲者としての無数の子供たちへの共感を喚起している。Angus Wilson が「リトル・ネ

ルの物語は死を主題としたものである。すべてがネルの死と悲しみへの誘いのための見世物（ショー）である（“The Little Nell story is about death ... these are all the show of Nell's death and the invitation to grief.”）（143）と述べているように、ネルの死の悲劇性を際立たせるためのさまざまな細工が見られる。Robert L. Patten が指摘するように、作品内には、明と暗、美と醜、生命と死、若さと老い、自由と束縛、都会と自然、慈善と偽善、善と悪など、さまざまな対比が存在している（105-18）。これらの対比のほとんどが、若いネルの死の悲劇性を際立たせる役割を果たしている。A. E. Dyson が指摘するように、作品全体がまるで骨董屋であるかのような印象を受ける（41）。物語は、骨董屋の陰気な部屋で物言わぬグロテスクな古物に囲まれて美しいネルが眠る場面に始まり、苦難と絶望の末、骨董屋と同じく古く暗い教会で埃まみれの老朽物に囲まれて眠るように死ぬ場面で終わる。この周囲の暗さとネルが生み出す光の対比が、みずみずしい生命の輝きと、その生命が幼くして散る残酷さを際立たせる装置となっている。『骨董屋』は、こうした装置によってライトアップされたネルの悲劇の死によって、当時の資本主義産業社会を弾劾する社会批判小説なのである。その意味で『骨董屋』は、『荒涼館』や『リトル・ドリット』など、後に続く彼の社会批判小説の原点となる作品とも言える。

### Ⅲ 不滅の死

これまで見てきたように『骨董屋』は、ネルの悲劇の死によって当時の功利的な産業社会の非情を告発する社会小説であったが、果たしてネルの死は人々に涙を絞らせるための、いわば犠牲死としての役割だけだったのだろうか。ネルの死には、少年労働者や子供たちの悲劇の死の意味の他に、死して無になるのではなく、善良なる魂は天国に昇りて不滅となり人々の中に永遠に残るのだというディケンズの魂の不滅思想があったのではないだろうか。

Jack Lindsay や Gabriel Pearson、John Kuchich など多くの批評家が

指摘しているように、ネルは、ディケンズが秘かに思いを寄せるも17才で突然死した義妹メアリ・ホガース (Mary Hogarth) をモデルにしている。実際、「若く美しく善良な彼女を17歳の若さで神は天使の列に入れ給うた (“young, beautiful and good, God in his mercy numbered her with his angels at the early age of seventeen”）」とメアリの墓石に刻ませた言葉と同じ「非常に若く、美しく、善良な (“so young, so beautiful, so good”）」(ch.72 : 604) という形容詞をネルの葬送の句にも使用している (*Charles Dickens Info*)。またネルの最期を書き終えたディケンズが Forster に宛てて、「ネルの死を書くことを考えただけでも、心の古傷が新たに血をふくような気がします。この悲しい物語のことを考えていると、愛するメアリが死んだのが昨日のどのような気がしてくるのです (“Old wounds bleed afresh when I only think of the way of doing it ... Dear Mary died yesterday, when I think of this sad story.”)」(1841年1月8日) (*Letters Vo. II .181-82*) と書き送っていることから、メア리를ネルに投影していたことが伺える。愛するメアリの死で悲しみに打ちひしがれたディケンズにとってメアリの死は受け入れ難く、墓碑に刻んだ言葉通り、次第にメアリは無になっただけではなく天国に迎えられ安らぎの内にあり彼女は永遠に自分の中で生き続けるのだ、という魂の不滅思想に至ったのではないだろうか。

メアリが昇天し天使となったごとく、ネルも死が近づくにつれ天国や天使を身近に感じるようになり最期には天使となっている。「善良と徳に捧げられた、罪と悲しみが絶対に訪れない別世界」(ch.54) である教会の小塔の階段を導かれるように昇っていったネルは、死から生へ通り抜け天国に近づいていくように感じながら、自然の中で戯れる子供たちの姿を見下ろしている (ch.53)。それは、ネルが天使となって下界を見下ろしている視点を先行体験していることに他ならない。教会で親しくなった少年は、ネルが天使になってしまうのではないかと心配する (ch.55)。一方ネルは、「心の中の思いす

べてが不死の確信にあふれ」(ch.72)、「たぶん悲しみに暮れている人は昼は青空を、夜はお星さまをあおいで、死んだ人たちがお墓ではなく、そこにいるのを知るようになるでしょう」(ch.54)と、自分自身が天に召され不滅となり得ることを確信している。

また他にも、ネルの昇天と天使化の疑似体験が用意されている。行き倒れたネルを介抱してくれた学校の先生 (Mr. Marton, The Schoolmaster) のところでしばらく厄介になっている時、先生の大的お気に入りの生徒だった小さな少年が死んでしまう。そしてネルはその死んだ少年の夢を2度も見る。1度目は、少年が死んだ夜に、死んだ少年が天使と共に幸せそうにほほえんでいる夢を見る (ch.26)。2度目は、古い教会に辿り着いた夜、聖書の絵で見たことがある天使の隊列と少年が自分を見下ろしている夢を見る (ch.52)。天に召され幸せそうに天使とほほ笑む少年のこれらの夢は、死が近いネルに死は恐ろしいものでなく、天に迎えられ幸福を得るのだということ伝えるものであり、ネルが少年の後に続くであろうことを暗示している。

事実、ネルの死の場面は、静かな美しさと深い安らぎ、完全な幸福の新生に満ち、少年の臨終の寝台の脇に立っていた同じ天使が威儀を正し同じ穏やかな顔で立っている (ch.71)。そしてネルの死の場面の挿絵には、聖母マリアが彼女を見下ろしている姿が描かれ、最後の挿絵には、4人の天使によって天に運ばれていくネルの姿が、まるですべての人の罪を贖い天に召されていく宗教画のキリストと見紛うばかりに神々しく描かれているのである。Masurが、“The description of death is saintly.” (49) と評したように、ネルは神の御国に迎えられ、天使に列せられたのである。Gissingは、この死の場面を感動的な美しさだとして、“Look back upon the close of that delightful novel, and who can deny its charm? But as a story of peaceful death it is beautifully imagined and touchingly told.”(211) と述べている。

社会批判という観点からネルの死を見ると、一見クウィルプと同じ死であ

るかのように見えるが、決してそうではない。ディケンズの魂の不滅思想の観点から改めて見てみると、その違いは明確である。ネルが天国へ行き天使に列せられたのとは対照的に、クウィルプは追手を阻もうとした自分の策にはまって溺れ死ぬという非業の死を遂げ、海賊の処刑場であった沼地で逆さまの状態ですげらしにされた無残なむくろを晒すことになった (ch.67)。もちろんその魂は、ネルが迎え入れられた天国とは対極の地獄行きであろう。これは彼の罪ゆえの当然の報いといえようが、まるであたかも処刑と見紛うばかりの厳しい描写である。William H. Marshall は“poetic justice” (76) と呼び、Philip Collins は死刑に反対していたディケンズがクウィルプに死の罰を与えていることは注目し、*“The process of his drowning is lovingly described.”* (252) とその出来栄を賞賛している。ディケンズはかつてない厳しい描写によって、天使ネルの死と大きな差異をつけたのである。

では、このネルの不滅の死はどのような役割を果たし、ディケンズはそれによって何を訴えようとしたのだろうか。ディケンズは、メアリが天使となり永遠に自分の心に生き続けるだろうと魂の不滅を信じたように、ネルの魂も永遠に人々の中に生き続けると信じたのである。つまり、愛情、献身、清純無垢、慈悲などの彼女の美德や善性が、人々の思い出の中で生き続け、彼らの行動に善なる影響を与え続けるだろうこと、それこそが永遠の生命だと考えたのである。潔白、善良なものは死滅せず、慈善、慈悲、清められた愛情が墓から出でて、世の中に影響を与える役目を果たしているのだという次の言葉に、そのディケンズの思想が端的に表れている。

There is nothing, ... no, nothing innocent or good, that dies, and is forgotten. Let us hold to that faith, or one. An infant, a prattling child, dying in its cradle, will live again in the better thoughts of those who loved it; and play its part, through them, in the redeeming actions of the world, though its body

be burnt to ashes or drowned in the deepest sea. There is not an angel added to the Host of Heaven but does its blessed work on earth in those that loved it here. Forgotten! oh, if the good deeds of human creatures could be traced to their source, ... for how much charity, mercy, and purified affection, would be seen to have their growth in dusty graves! (ch.54 : 421)

また、ネルの葬儀のあと、慈悲、慈善、愛情など百もの美德が彼女の死後世間をめぐり、人々の涙から善や優しさが生まれ、天に通じる光の道となると語った次の言葉にも、ネルの美德が人々の中に死後も広がり、受け継がれ、世の光となるであろうことを信じるディケンズを見ることができる。

When Death strikes down the innocent and young, for every fragile form from which he lets the panting spirit free, a hundred virtues rise, in shapes of mercy, charity, and love, to walk the world, and bless it. Of every tear that sorrowing mortals shed on such green graves, some good is born, some gentler nature comes. In the Destroyer's steps there spring up bright creations that defy his power, and his dark path becomes a way of light to Heaven. (ch.72 : 563)

天使となったネルの心の美しさや優しさは、確実に人々の心に浸透している。ネルが住む村では、みながネルに対して愛情を寄せるようになり、同じ感情、思いやり、同情を抱くようになる (ch.55)。彼女の葬儀では、男女多くの人々が訪れ涙し、互いに譲り合いながら祈りを捧げた。

天使ネルの死は“不滅の死”であり、その善性によって人々の中に善い影響を与え続けるという神聖な役割を果たしているのである。それはまさに、すべての人々の罪を贖い十字架において自己犠牲の死を遂げ、死後その慈悲や博愛の精神が世界にあまねく広がっていったイエス・キリストのようである。多くの不運な子供たちの象徴として自己犠牲の死を遂げた聖女ネルもま



たその死後彼女が体現する「慈善、慈悲、清められた愛情」(ch.54)といった善の精神が人々の中に波及しているのである。ディケンズが考え訴えようとしたもの、それは、ネルが体現する愛、寛容、慈悲といった善の原理によって、欲望、利己心、無慈悲といった悪の原理に支配されていた当時の社会がより良い社会へと移行していくことなのである。J. H. Miller が、“Dickens recognizes that the rural paradise no longer really exists.” (95) と述べているように、荒廃した都会に対する理想郷として美しい田園風景が描かれているものの、ディケンズは時代を逆行した田園回帰を期待しているわけではない。ネルが辿り着いた田舎の教会が古い過去の遺物として描かれていることからわかるように、近代化が進む時代の歯車をもはや止める術はないことをよく認識していたに違いない。ディケンズは、拝金主義に毒され人々が無関心と利己心に支配された産業社会に、ネルが体現する人間の善性があまねく広がり、温かなヒューマニズムに基づく近代文明社会が実現することを願ったのではないだろうか。

分断された社会の様相は、人の苦しみや痛みなど知る由もない上流階級の冷淡さと、貧しさの中にあっても人情を忘れない下層階級との対比に如実にあらわれている。中でも、裕福な生徒をえこひいきし貧しい生徒には冷淡な、上流階級の子女が通う寄宿学校の校長モンフラザーズ先生 (Miss Monflathers) と、そこに勤める貧しい先生ミス・エドワーズ (Miss Edwardas) の対比は鮮明である。モンフラザーズ先生は、お金持ちの子は刺繍を仕事にし、貧しい子はその幼い力を国の工業生産発展のために捧げるべきで、仕事が辛ければ辛いほど幸せなのだと言いつつ (ch.31)。それとは対照的に、その校長の言葉に思わず涙を流したネルのハンカチを優しく拾ってくれたのが、母親を亡くし貧しいがゆえに寄宿学校で奉公しながら生徒たちに教えているミス・エドワーズであった。校長は彼女を、「下層階級の者に愛情を寄せ、いつもその味方になるなんて異常なことで、元々の身分のためのひどく野卑な性根なのだ」(ch.31) と犯罪人のごとく非難する。

一方、同じ苦難にある人の苦しみがわかる下層階級の人たちは、思いやりに溢れて温かい。ネルを敬愛する善良なキット (Kit, Christopher Nubbles) やその一家は貧しくても家族愛にあふれ、キットが初めてのお給金で一家とバーバラ (Barbara) とその母親 (Barbara's Mother) をアスリー座の芝居見物と牡蠣の食事に招待する場面は、Gissing が “Remember that such a scene as this was new in literature, a bold innovation.” (88) と称賛するように、ほのぼのとした庶民の小さな歓びが漂う微笑ましいものである (ch.39)。キットの母ナップルズ夫人 (Mrs. Nubbles) とバーバラの母は常に共感で結ばれていて、キットがクウィルプの陰謀で逮捕された時などは共に悲しみを分かち合う。また旅でも多くの心優しい貧しい人々に出会うが、中でも、子供の頃から溶鉱炉で働き生涯その労役に鎖でつながれながらも、自分の粗末な食事を分け与え、すすけた1ペニー硬貨2枚を、真っ黒になった手で優しく手渡してくれた溶鉱炉夫 (ch.44) は、貧しい心を持った上流階級の人々よりも、誰よりも尊い心を持った高潔な人間といえよう。いずれも貧しくても心豊かな人間性を有する下層階級に対して、彼らの上に立つ上流階級の人たちは、彼らに対する同情は持ち合わせてはおらず、頭にあるのはお金とそれを生み出す産業の発展のみである。こうした分断された社会に対して、ディケンズは、ネルの善性が広がり、思いやりと共感によって結ばれた産業社会を希求している。ディケンズは、自分の苦しみに結び付け共感できる心こそ神に喜ばれる清らかな感情の源泉だとして次のように述べている。

Why did she [Nell] bear a grateful heart because they [Miss Edwards and her sister] had met, and feel it pain to think that they would shortly part? Let us not believe that any selfish reference-unconscious thought it might have been-to her own trials awoke this sympathy, but thank God that the innocent joys of others can strongly move us, and that we,

even in our fallen nature, have one source of pure emotion which must be prized in Heaven. (ch.32 : 251)

社会批判小説におけるネルの死は悲劇の死であったが、同時にメアリへの追慕から見たネルの死は無となる死ではなく、彼女が体現する愛、慈悲などの善性が人々に広がり、人や社会を幸福なものにしていく永遠の生命を持った死であった。ネルの“不滅の死”は、もう一面の“悲劇の死”によって示された近代社会の問題点に対する解決策を提示するものとなっているのである。

#### IV 結び

これまで見てきたようにネルの死は、非情な産業社会の犠牲の象徴という役割と、ネルの善性があまねく世を照らす幸福な社会の実現という解決策の提示という役割—“死”と“死ではない死”という相反する二つの意味—が二枚重ねになった死であった。そしてこの小説は、無慈悲な資本主義が支配する産業社会の底辺で苦悩する多くの労働者や少年労働者の苦難と悲劇をネルが象徴した、当時のイギリス社会を弾劾する社会批判小説であった。それと同時に、愛する人の死は永遠の別れなどではなく、天国で永遠の生命を得て自分と共にあり続けるのだと信じるディケンズの思いが宿った、メアリへのエレジーでもあった。同様に、ネルの不死の死に浸透する愛や共感の中にもそれが、イギリスが抱える社会問題の解決の鍵だとするディケンズのメッセージが託されていたのである。

ここでネルの善性を受け継ぐもう1人の巡礼者キットの役割を見ておきたい。汚辱にまみれたロンドン都市社会から隔絶された教会で息を引き取るネルの神聖な死は、その美しい精神の超越性を示すだけでなく、イエス・キリストの自己犠牲の死のメタファーでもあった。多くの不運な子供たちに代わって世の不条理を告発するために悲劇の死を遂げなければならなかった聖女ネルに代わり、彼女が体現する善性を、俗世に残って波及させていく役割を果

たすのがキットである。キットは、ネルを中心とする善の仲間属しているが、聖性をまとった彼女とは対照的に、至って世俗的な人間として描かれている。一見したところ、キットは彼女とは全く別の人生を歩んでいるようだが、精査すると両者の運命には奇妙な照応関係が見られる。

ネルの巡礼の物語は、6月のある朝にロンドンを旅立つところから始まるが、キットの巡礼の物語も、彼女が出奔したのと同じ日に仕事を求めて街を出、ネルがジャーリー夫人に拾われたのとほぼ同じ頃（正確には前日）に彼もガーランド夫妻と出会い住み込み奉公の職を得ている。クウィルプは借金を梃子にネルの経済的拠り所である骨董屋を奪い去るが、悪徳弁護士ブラス兄妹は、法の力を武器にキットから職場や家族といった社会的基盤を奪い去る。キットの巡礼の旅に描かれているのは、本来人を守るべき法がそれを熟知する者たちに悪用され無実の人間を罠に陥れるプロセスである。両者に共通するのは、その表向きの合法性とそれとは裏腹の冷酷さと不条理さであり、より狡猾な者が無垢な人間を陥れる社会の不正義を浮き彫りにしている。ネルの巡礼の旅では、天国に召されるネルの神聖な死とクウィルプの非業の死によって善性の勝利が描かれており、ネルと同じ日に独り立ちの歩みを始め投獄体験という逆境の果てにネルの許に辿り着くキットの巡礼の旅では、クウィルプの溺死した同じ深い霧の夜に無罪放免となることで勝利する。しかし、聖人ネルがその純粋性ゆえにクウィルプの悪意に対し無力であり、祖父の横暴に対しても従順な姿勢を崩さないのに対して、キットは現世的であり、クウィルプに対しても手厳しい叱責の言葉でくっつきかかり、恐れを抱くことなく彼に対峙しようとする善の中心的役割を果たしていく。クウィルプの奸計にはまり一時は投獄されたものの、周囲の言葉に流されやすく善悪の狭間を揺れ動く人物で“swivel”（回転する／させる）という言葉で連想させるディック・スウィヴェラー（Dick, Richard Swiveller）の存在が軸となり、善と悪の攻守がぐるりと逆転する。キット救出のためにすべての善の軍勢が集結することでその求心力となる。永遠の世界へと旅立ったネル

に代わって、キットは下界に留まり、その善性の波及を引き継ぐことになる力強い後継者となっている。

ネルの死後、愛と思いやりに満ちた善の仲間たちは、みな幸せになっている。濡れ衣が晴れて釈放されたキットは、バーバラとめでたく結婚する。ガーランド夫妻 (Mr. and Mrs. Garland) は弟の善良なバッチェラー (the Bachelor) と一緒に住むことになり、息子のエイベル氏 (Abel Garland) は若いはいにかみやの女性 (the most bashful young lady) と結婚する。ディック・スウィヴェラーは、ブラス弁護士事務所をくびになり悪の仲間から追放された後、熱病にかかり、ちびの女中 (the small servant) の手厚い看護の甲斐あって回復する。目覚めると善の仲間が彼の周囲を取り囲んでおり、その仲間入りを果たす。以前は、兄やクウィルプにけしかけられネルの財産目当ての結婚を目論んだりする道楽者だったが、生死をさまよう熱病の洗礼を受けたあとは、財産も教育もないちび女中のために現実的で利他的な生き方をする別人に生まれ変わる。叔母の財産を相続した彼は、ちび女中につけた“侯爵夫人”という現実離れした呼び名をやめ、ソフロニア・スフィンクス (Sophronia Sphynx) と新しく命名し、彼女の教育に長く献身した後、結婚して愛情深い夫となり幸せな家庭を築く。

一方、悪の仲間はみな厳しい罰を受ける。前述のクウィルプは海賊の処刑場で地獄行きとなる。彼の子分で窃盗の罪を着せようとキットを罠にはめた顧問弁護士のサムソン・ブラス (Sampson Brass) は、その姦計がばれ弁護士資格をはく奪の上刑務所行きとなり、妹サリー (Miss Sarah (Sally) Brass) は食べ物のくずを求めて町を徘徊する乞食となる。賭博師アイザック・リスト (Isaac List) は、妹ネルの財産を狙っていた放蕩の兄フレデリック・トレント (Frederick Trent) と共に賭博で失敗し、法律の処罰を受けることになる。

こうして勸善懲悪がめでたく遂行されたあとには、善の次なる世代の確実な芽吹きが伝えられる。エイベル氏夫妻に生まれた子供には「善良さと慈悲

心の増殖」(ch.73)というお役目がしっかりと与えられており、彼らにはキットによって、“good Miss Nell”のお話が語り継がれていくのである。彼らの増殖によって、ディケンズが願ったように、ネルが残した善の影響力がこれからも身分を超え、年齢を超え、世代を超えて、多くの人々の心に広がり、人と人の心が共感と思いやりで結ばれた、「陽気、喜び、愛と歓迎、温かい心、幸福の涙」(ch.68)に溢れた幸福な現代社会が到来するであろうことが示唆されているのである。

#### 注

- 1 同じくディケンズの親友で俳優の William Charles Macready も、“I have never read printed words that gave me so much pain.” (*Victorian Calendar*) とつらい胸の内を吐露している<sup>1</sup>。また、判事 Francis Jeffrey は、“nothing so good as Nell since Cordelia.” と評している (Fielding 64)。

#### 引用・参考文献

- Bennett, Rachel. “Punch versus Christian in *The Old Curiosity Shop*,” *The Review of English Studies (New Series)* 22. London: Oxford UP, 1971.
- Bunyan, John. *The Pilgrim’s Progress*. London: J. M. Dent & Sons, 1932. Print.
- Cecil, David. *Early Victorian Novelists: Essays in Reevaluation*. Hamondsworth: Penguin, 1948.
- Collins, Philip. *Dickens and Crime*. London: Macmillan, 1964.
- Dickens, Charles. Introduction. *The Old Curiosity Shop* by Peter Washington. New York: Penguin Classics, 2001.
- . Introduction. *The Old Curiosity Shop* by Peter Preston. Hertfordshire: Wordsworth Classics, 1995.
- . *The Old Curiosity Shop*. Oxford: Clarendon Press, 1977. Print.
- . *Oliver Twist*. Oxford: Oxford UP, 1999.
- . *The Letters of Charles Dickens Vol.2, 1857-1870*. Ed. Mamie Dickens Georgina Hogarth. New York: FQ Books, 2010.
- Dyson, A. E. *The Inimitable Dickens: A Reading of the Novels*. London: Macmillan, 1970.

- . “*The Old Curiosity Shop: Innocence and the Grotesque*” 1966. *Dickens: Modern Judgements*. Ed. A. E. Dyson. London: Macmillan, 1968.
- Fielding, K. J. *Charles Dickens: A Critical Introduction*. London: Longmans, 1965.
- Ford, George H. *Dickens and His Reader: Aspect of Novel Criticism Since 1836*. New York: Gordian Press, 1974.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens Vol.1, 1872-74*. Ed. A. J. Hoppe. London: Dent, 1969.
- Gilman, Sander L. *Illness and Image*. New Jersey: Transaction Publishers, 2015.
- Gissing, George. *Charles Dickens*. Washington: Kennikat Press, 1966.
- Hobsbaum, Philip. *A Reader's Guide to Charles Dickens*. New York: Syracuse UP, 1998.
- Hughes, Tom. *Victorian Calendar, February 6, 1841 --- The Death of “Little Nell.”* 2011. <http://victoriancalendar.blogspot.jp/2011/01/february-6-1841-death-of-little-nell.html> (accessed 2017-10-17).
- Huxley, Aldous. *Vulgarity in Literature*. London: Chatto and Windus, 1930.
- Jack Lindsay, *Charles Dickens: A Biographical and Critical Study*. London: Andrew Darkers, 1950.
- John Kuchich, *Excess and Restraint in the Novels of Charles Dickens*. Athens: University of Georgia Press, 1981.
- Johnson, Edgar. *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph vol.1*. New York: Simon and Schuster, 1952.
- Kincaid, James R. *Dickens and the Rhetoric of Laughter*. Oxford: Clarendon, 1971.
- Marcus, Steven. *Dickens from Pickwick to Dombey*. London: Norton, 1985.
- Marshall, William. H. *The World of the Victorian Novel*. New York: Barnes & Company Press, 1968.
- Masur, Margo. *Inhumanly Beautiful: The Aesthetics of the Nineteenth-Century Deathbed Scene*. Buffalo: Buffalo State UP, 2015.
- Miller, J. H. *Charles Dickens: The World of His Novels*. Cambridge: Harvard UP, 1958.
- Patten, Robert L. *Charles Dickens and His Publishers*. Oxford: Oxford UP, 1978.
- Pearson, Gabriel. “*The Old Curiosity Shop,*” *Dickens and the 12th Century*.

- Ed. John Gross and Gabriel Pearson. London: Routledge and Kegan Paul, 1962.
- Pearson, Hesketh. *The Life of Oscar Wilde*. London: Methuen, 1949.
- Perry, Marsha. *Charles Dickens Info*. 2018. [www.charlesdickensinfo.com](http://www.charlesdickensinfo.com) (accessed 2018-01-30).
- Pope-Hennessy, Una. *Charles Dickens*. London: Chatto & Windus, 1968.
- Preston, Peter. “Introduction.” *The Old Curiosity Shop*. Hertfordshire: Wordsworth Classics, 1995.
- Smollett, Tobias. *The Expedition of Humphry Clinker*. Ed. Angus Ross. Harmondsworth: Penguin, 1967.
- Spilka, Mark. “Little Nell Revisited,” *Papers of the Michigan Academy of Science, Arts, and Letters*. 45 (1960): 427-37.
- Victorian Calendar, February 6, 1841 --- The Death of “Little Nell.”* 2011. <http://victoriancalendar.blogspot.jp/2011/01/february-6-1841-death-of-little-nell.html> (accessed 2017-10-17).
- Ward, A. W. *Dickens, English Men of Letters*. London: Macmillan, 1901.
- Washington, Peter. “Introduction.” *The Old Curiosity Shop*. London: Penguin Classics, 2001.
- Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. London: Martin Secker & Warburg, 1970.
- Wilson, Edmund. *The Wound and the Bow: Seven Studies in Literature*. Methuen: Methuen UP, 1961.
- ディケンズ、チャールズ『骨董屋（上・下）』北川悌二訳 東京・筑摩書房、1989. Print.